

# 文学と公益

— 詩人・大滝安吉に捧げる試論 —

門脇 道雄

文学に公益性なるものが認められるならば、その内実  
はどのようなものであるのか。また、公益性をもつ文学  
においては、何が可能なのか。書き記された文字が読み  
手の心に共鳴するとき、限りある生命は他者へと引き継  
がれ、自己もまた他者を生きる。書物を媒介にし、書き  
手と読み手が向き合うことで成立する読書という営為は、  
相互存在というありようを浮き彫りにし、氣遣いや思い  
やりといった本来的な人間性を生成することを、酒田市  
の詩人・大滝安吉の作品を通して考察する。

## 一、ひとつの試論

わたしたちはなぜいまここにいるのか？ これがあら

ゆる問いに優先すべき問いであり、あらゆる問いにおけ  
る第一級の問いである。問いかける根拠そのものが問い  
のなかにあり、問いかけることによつて提示されうる解  
答が問いのなかに吸いこまれていくように思われるから  
だ。すなわち、△わたしたち△という存在についての問  
い、△いま△という時間についての問い、△ここ△とい  
う空間についての問い——冒頭の問いはこれら三つの根  
源的な問いを内包しており、存在と時間と空間について  
の問いが答えられたあとでさえ、なお問いとしてあるよ  
うな問いであるからだ。

わたしたちはなぜいまここでないところにはいないの  
か？ という反転の問いにさえ、解答の行方は果てしな  
い。わたしたちは、存在しているかぎり、いまここにあ

ることそれ自体が変わることなくつづく日常にいて、いまここにあることを受け入れざるをえない状況に投げ込まれているからだ。つまり、「いまここ」は問いよりも先にあり、「わたしたち」もまた、問いよりも先んじて在るように思われる。要するに、わたしたちはなぜいまここでないところにいないのか？ という問いもまた、あらゆる問いを超越しながら、なおかつ問いとしてあるように思われる。

問いが解答されえず、問いが問いとしてありつづける状況は謎であり、それは神秘というヴェールをさえかぶりうる。すなわち、わたしたちがいまここにいること自体が問いであり、わたしたちの存在それ自体が謎であるゆえに、希求すべき何ものかが未知なるものとして現前している。

しかしながら、問いとは関わりなく問題は発生し、謎とは関わりなく事件が起こっている。たとえば自殺、たとえば殺人。それらは、問いを抹消し、継続する謎を断絶させる。わたしたちが問いそのものであり問いを継続させうるならば、問題や事件を回避するための鍵は問い

を持続させることにあるように思われる。

## 二、自殺・殺人回避のプログラム

Aとは何か。Aとは何ではないか。Aでないとは何か。Aでないとは何ではないか。Aについて考えるときに想定される問いのプログラムとして、以上四つの類型が考えられる。Aに「公益」をあてはめれば「公益学」、「詩」をあてはめれば「詩学」なるものが形成されよう。あるものを考察するとき、その原理に反する事象や理念を考察してゆくことが有効である場合がある。また、そのようなアプローチが体系的な学問のなかには仮説として常に想定されていていい。

Aに「人間」をあてはめてみる。「人間とは何か」を考えるときに、それを成立させている原理に反するもののひとつに自殺がある。それは「人間とは何ではないか」という問いを引き出してくれる。人間とは生きゆく存在であるとき、自らの意志で自らの生を断ち切ることであ

る自殺とは、人間であることの原理に対立するようにして「人間とは何か」を問いかけている。

また、人間を存在せしめている原理に反するもののものうひとつに殺人がある。殺人とは、他者の生命を奪うことであり、自らの生命が奪われることである。自殺は己れの意志によつて行われることであるのに対し、殺人は己れの意志に反して行われる。それは「人間でないとは何ではないか」という問いを引き出してくれる。人間とは生きゆく存在であるとき、他者の意志で自らの生が断ち切られることを意味する殺人とは、人間でないことの様態が回避されるべく「人間でないとは何か」を問いかけている。

自殺あるいは殺人という現象に現れているのは、自己の生の意味の喪失であり、他者の生の意義の抹殺である。すると、自殺あるいは殺人の回避こそは、自己の生および他者の生の意義を浮かび上がらせるにちがいない。

自殺は哲学における重要な問題であり、殺人は倫理学における解決すべき課題である。しかしながら、自殺と殺人というふたつの現象が起こり、また起こりうる現状

においては、哲学も倫理学もその無力を提示しているにすぎない。複雑多様化しながら進展しうる現代社会においては、新たな哲学・倫理学が模索されねばならない。

しかしながら、「いまここ」にある人間存在のありようが正常ではないと考えられるとき、仮説されてしかるべきことはあるゆる学問の無力と反故である。哲学・倫理学の新たな構築というよりは、哲学・倫理学をも包括するような新たな学問の構築こそが求められており、新たな学問——名称は何でもかまわないが、たとえば公益学——の理念が注入されることによつて新たな人間学の展開が期待されていい。

人間とは何であり、何ではないか。人間でないとは何であり、何ではないか。人間はいかにあり、どのように存在すればいいのか。公益が「世のため人のため」という考えに立脚するものであるならば、それは自殺・殺人という行為を回避しうる学問を生むにちがいない。自らを殺すこと及び人を殺すことは、「世のため人のため」という理念の対極にあるものであるからだ。人間学は根本的な公益学をその基底に内包するであろう。公益とい

う観点を注入されることで展開されるのは、倫理的存在論的人間学と言える。

自殺が自己の抹消、殺人が他者の抹殺であるとき、想定される救いのプログラムは人間学にある。人間がいかにあればいいかの学問体系は、抹消や抹殺を回避してくれるにちがいない。しかしながら、倫理的存在論的人間学とはいかなるものなのか。言い換えれば、人間とは何かという根本的な問題を再提起しながら、公益という観点を注入されることで新たに展開されるような学問体系、具体的には自殺・殺人が回避されうるような学問体系の構築は、いかにして可能なのか。

## 三、読書という営為

人間、誰もがフルートを吹けるようになる必要はない。誰もがテニスができるようになる必要はない。誰もが微分積分がわかり、英文を五文型に分類でき、歴史上の事

実を暗記している必要はない。また、誰もが調理をすることができ、コンピューターを操作することができ、詩が書ける必要もない。それらは誰かができればいい。社会を見渡せばわかるように、さまざまな人間がさまざまなことを行うことができ、協力・協同することで大なり小なりの共同体が形成されており、等し並みに全員がそれらをできるようにする必要などどこにもない。しかしながら、読書はどうだろうか。

たとえば、等し並みに全員が読まねばならない一冊の本などというものが存在するのだろうか。それを読まねば生きてはいけないといったような。かりにそのような本があるのだとすれば、人間だれもがそれを読んでいることになる。しかし、その本を誰も指摘することができない。したがって、究極の一冊などというものはありえない。それならば、読書もまた、誰かができればいい類いの営為なのだろうか。

次のような文章がある。

一日に何度も私がその証人になったり役者になった

りしているのに、どうしても慣れつこになれない奇跡が一つある。それは読書という奇跡だ。文字で真つ黒になった紙の束を受け取り、見つめていると、驚嘆すべきものが生まれてくる。私の精神の中に、領主や美しい奥方たち、お城、彫像や珍しい動物たちの住むすばらしい公園などが不意にわき上がってくる。息がつまるほどに滑稽な、あるいは感動的な物語が展開される。そのため私は身震いも笑いも涙もおさえられなくなる。それなのに、こうして私の精神の中に出現するものの源はといったら、黒ずんだ紙の他にはない。なんとというパラドックス！

だが、それら私の精神の中に出現するものは、本当にこの黒ずんだ紙の他にその源をもっていないのだろうか？ よく考えてみると、疑ってかかったほうがよさそうだ。それでは、私、読者としての私はどうだろうか？ というのも、読書という奇跡によつて私の精神の中で展開する夢幻劇は、書かれたテクストの作品であるのと同じだけ、まさに私の精神の作品でもあるのだから。たしかに、私は一冊の本にはいつでも二人

の作者がいると思う。一人はその本を書いた人。もう一人はその本を読む人。本は書かれたとしても読まれなければ、真の意味で存在しているとは言えない。読まれない本は、読者に呼びかけている最中に力尽きてしまう潜在的な存在に他ならず、風の吹くまま狂ったように飛び回る羽根のある種子のようだ。そのような種子は、しかるべき土地の窪みに落ちて、ついに自身になれるまで、つまり葉と花と実になれるまで飛び続ける。<sup>①</sup>

(ミシェル・トゥルニエ／松田浩則訳『海辺のフィア  
ンセたち』より)

ミシェル・トゥルニエが八一冊の本にはいつでも二人の作者がいるVと述べるとき、読書とは受動的な行為ではなく能動的な行為であることを示唆している。書き手と読み手の複合体がひとつの書物であり、一冊の本を媒体にして書き手と読み手が対峙すると考えてもいい。いずれにせよ、書き手と読み手のコミュニケーションのために用意されたテキストとしての書物が、己れの内省を

深め、精神のありようを規定してゆく。

何ものかが慌ただしく飛び交いながら去つてゆく高度情報社会にあつては、むしろ立ち止まることが重要であるように思われる。無為や瞑想によつてこそ、豊饒な精神世界が広がつてゆく。内省と思索の時間がそこに展開されるからだ。それはむしろ、読書以外の行為によつてもいい。しかしながら、人間が他者との関係性においてのみ実存する存在ならば、数多い他者と接することを図るとき、読書に代わりうる営為はどこにあるのか。

書き手という自己が読み手という他者に対峙し、読み手という自己が書き手という他者に対峙する。相互存在としてのありようが読書という営為に現出しており、氣遣いや共感が生まれるのはそこからだ。

読書とは本を媒体にして自己と向き合う行為であり、それをやめたら己れはないも同然である。つまり、読書とは人間に必須の営為である。書物であふれてしまった現代、究極の一冊などありようがなく、他者に薦められて読むべき本もないにしても、内省しうる任意の一冊が人間には欠くべからざるもののように思える。

へ精神の中で展開する夢幻劇は、受動的な営為からは生まれえない。生きるとは、日々、己れの生を創りあげていくことであり、他者との対話が自己との対話にまで高まりながら精神世界を構築してゆくところに、読書という営為がある。

## 四、自己という他者、

### 他者という自己

カナール Canale によれば、コミュニケーション能力には、言語体系を習得したり文を生成する Grammatical Competence（文法能力）、言語が使用される社会的文脈を理解する Sociolinguistic Competence（社会言語能力）、意味ある全体を組み立てたり文連続の統合体を理解する Discourse Competence（談話能力）、状況に応じ知識の限界に対処する Strategic Competence（方略能力）の四つがある。そして、言語能力と言語運用は不即不離の關係にあ

り、言語は創造的に使用されることで習得されてゆく。

しかしながら、何のために言語などというものがあるのだろうか。言語能力が低いときに、たしかに表現の幅や多様性は奪われている。しかし、音域の狭い歌手が音域の広い歌手よりも必ずしも劣るわけではないように、言語能力の弱さは表現されうる世界の貧弱さを意味しているわけではない。言語はコミュニケーションのひとつのツール（道具）でしかないこと、能力は目的ではなく手段であることにこそ、着目しなければならない。

コミュニケーションには、情報を伝えるものと情報を伝える必要のないものの二種類がある。後者にはあいさつのような人間関係を滑らかにさせるものがあり、言葉は交わされた途端にその目的を済ますが、情報伝達が目的である場合でさえ、ある情報が一方から他方へと流れたとき、言葉は用済みになる。つまり、インフォメーション・ギャップ（情報格差）が解消されることでコミュニケーションが達成される状況では、言語は交わされた途端にその機能を終えている。一方、文学における言語は、記されたときに、コミュニケーションのための時間を生

きる。それは、トゥルニエの言説で言えば、ハ葉と花と実になれるまで飛び続けるV種子のように将来性を生きるだろう。しかしながら、ここにおいても言語能力は手段にとどまっている。文学においては、カナレが指摘した文法能力・社会言語能力・談話能力・方略能力の四つのコミュニケーション能力を基盤にして、他者及び自己と対話しうる能力が要求されていると言える。

たとえば、酒田市に生まれ育った大滝安吉という人間がいる。面識がなくとも触れえるのは、彼が詩編と詩論を残したからである。書き手は読み手によっていつでも蘇りうる。死後に生きる生があるとすれば、こういうことだ。死者も生者も読書という営為によって実存しうる。つまり、読書という営為によって、相互存在としての他者と自己が掘り起こされるばかりでなく、ハ精神の中で展開する夢幻劇Vによって創られる生という存在原理が映し出される。生きた記憶が読み手の脳に蘇り、書き手の問いは存続している。読み手によって受け継がれる問いの存在を、たとえば次のような文章によって確認してもいい。

人間にとって困難な、そして根本的な二つの問題がある。一つは永遠と限られた生命との関係。今一つは社会に於ける全体と個との関係についてである。

宇宙は果てしないと言うけれども、これは単なる形容ではない。僕等は事実、無限に拡がっている宇宙に点在する一つの星の上に 住み、そして無限の過去から、無限の未来へ流れる時の中で、生れかつ死んで行くものに過ぎない。この形容しようもない時間と空間そしてその中の泡沫の如き一瞬の僕等の生。

ここから最初の問題が生れる。つまり、無限の時間と空間の中の限られた僕等の短い生に、一体どのような意味があるのか、或いはどのような意味があると考ええる可きかということがある。

時間とは一体何か。過去とは、現在とは、そして未来とは何か。時間と空間とは如何なる関係にあるのか。生とは如何なる状態を言い、そして死とは何か。等がここで問題にされる。

古来、宗教、哲学、生物学、物理学等はこれらにつ

いて千差万別の考え方をして来ているわけだが、これを詩の面からみると、所謂形而上学的傾向の詩というのは、このような問題について詩を通じて解答を与えようとしているものを指している。つまり、宇宙に対し直接己を体面させ、茫漠と流れる霧のような永遠の中に忽ち消え去ろうとする己の存在の意味を詩によって確認しようというのである。

〔現代詩の方向〕「初出は『銜』二十号、昭和三十年一月』の冒頭部分）

人間存在における根本的な問題は、 $\wedge$ 永遠と限られた生命との関係 $\vee$ 及び $\wedge$ 社会に於ける全体と個との関係 $\vee$ であるという。しかしながら、この二つの問題の深層にはより根本的な問題が秘められている。つまり、なぜ人間存在などというものがあるのか。問いは位相を変えて問い直されうる。問いに対する解答が見当たらないからばかりではない。問いかけつづけることが存在であるようでありようへと、問いの内実が存在それ自体を促してゆくからだ。したがって、問いは自らによって設定され、



問いを生むこと自体に己れの生があると云つていい。

この世に存在してしまつたものにとつて投げかけうる問いは、存在することの理ではなく、むしろ存在しうる己れの可能性のありようである。△永遠と限られた生命との関係▽は問いとなつて大滝安吉の存在を規定してゆくだろう。それは、己れのありようをこの世に提示することである。考察する者の数だけ解答はありうる。そして、問いは転位されゆくだろう。たとえば、かりに、個としての生命が永遠に存続するものであるならば、人間存在はどう規定されるのか。不死としての生命がありうるものならば、その存在の意義は何なのか。個体が消滅しないならば、個体の誕生にはどんな意味があると考えべきなのか。

問いの視座を回転させたときに判明してくる現象がある。死すべき存在であるところの人間が死なずに存在するということは、どういうことであるのか。死なないならば、いつまで存在しつづけるのか。つまり、永久に生きつづける存在であるとすれば、その存在形態とはどのようなものであるのか。

永遠が無限の時間を表すのだとしたら、人間存在もまた無限の時間へと組み込まれていることになるだろう。年を取ることが老成することだとしたら、不死の人間存在とはどこまで老いると考えるべきなのか。個の成長が成熟・老成・死へと辿らないならば、成長とは何であると考えべきなのか。

ヘンリック・スコリモフスキーによれば、人間原理は宇宙のありようと結びついていると同じように、宇宙原理は人間のありようと深く結びついている。彼は述べる。△なぜ宇宙はこのような姿で存在するのか。なぜなら、私たちがここにいるからだ<sup>(3)</sup>。大滝安吉の志向は、スコリモフスキーが提唱するエココスモロジーの志向と同じ方向を向いている。新たな文明哲学、エコフィロソフィなるものの特徴のひとつとしてあげられている「靈性」は、靈的に死んでいるこれまでの哲学に対し、超物質的な経験を生み出しうるものであり、それはたとえば詩というもののありようと結びついている。△己の存在の意味を詩によつて確認しようという▽詩人は、宇宙の意味を追い求めながら宇宙内存在としての己れのありようを

探索するにちがいない。

大滝安吉（一九二七—一九六五）は、父・鯉吉、母・直代の五男として、昭和二年三月三十一日、山形県酒田市（当時は酒田町）下中町一〇番地に生まれた。昭和十四年四月、山形県立酒田中学校に入学。昭和十八年十二月、海軍経理学校に入学し、昭和二十年八月十五日、敗戦により同校卒業。昭和二十一年四月、東北大学法文学部に入學するも、昭和二十三年八月に結核が発病し、同校休学。昭和二十八年八月、公立酒田病院に入院。昭和三十一年十月に退院し、木村屋（自宅）に勤務する。昭和三十五年四月、本間病院に入院し、昭和三十六年十月退院。昭和三十六年十一月、土田いほ子と結婚し、酒田市東中ノ口町に新居を構える。昭和四十年三月十五日、数日來の風邪がこじれ、未明二時二十分、満三十七歳十一カ月の生涯を終えた。最後の言葉は「今、何時だ？」と妻に聞いた言葉だったという（以上は、大滝安吉詩篇詩論集『純白の意志』の「大滝安吉・略年譜」による）。

昭和二十五年頃から本格的に詩を書き始め、同年七

月に池田昭二・北原宏と詩誌『ら・ぶるーえ』を創刊し、三号まで刊行。昭和二十六年十一月に本間病院の療養者・恢復者たちによる『療養ニュース』を創刊し、四号からは『太陽』と改題されて（通算二十三号）、昭和二十九年五月まで吉野弘らと編集・運営に参加した。また、『太陽』とは別にサークル詩誌『笹』が池田昭二の提唱で昭和二十七年の秋ごろに創刊され、二号から大滝安吉が参加して、五十七号（昭和三十五年八月）で終刊となるまで精力的に書き続けた。『笹』は昭和三十七年六月に復刊され、復刊『笹』九号（昭和三十八年十月）に発表した詩「早春」が絶筆となった。また、『笹』に発表するかたわら、『詩学』にも投稿を続け、昭和三十四年二月号には新人推薦作品を発表するに至った。ほかには『権』に作品を発表したり、『現代詩』にも作品が掲載された。亡くなるまで九十篇近くの詩作品を発表したが生前に詩集は刊行されず、昭和四十一年六月に遺稿詩集『大滝安吉詩集』が吉野弘の編集によって刊行された（以上は、大滝安吉詩篇詩論集『純白の意志』における吉野弘の「あとがき」に基づく）。また、昭和

五十九年三月には、前出詩集に「現代詩の方向」「形象化について」「詩とは何か」「意識と無意識」の四本の詩論と英訳詩「In the Museum」《博物館にて》が加えられた詩篇詩論集『純白の意志』（花神社）が吉野弘の編集によって出版された。また、平成十六年三月十五日には、『大滝安吉詩集拾遺——谷底の文学と青空と——』が姪の内藤三保によって発行された。

詩集をひもとくことによって生じる情動は、ひとつの世界が立ち現れることへの畏怖と期待である。言い換えれば、世界への畏怖と期待なくして、詩集は立ち現れない。したがって、書き手の世界は詩集が作られた段階では生成されてはいない。読み手が参加することによってそれは生成されうる。読まれることによって生成される世界が、詩集を媒体にして潜在していると言っている。しかしながら、読み手によって生成されうる世界は、書き手によって創造されたものである。こうして、生成されうる世界が読み手と書き手の相互関係性に拠っているところに、文芸というコミュニケーションの秘密がある。

とはいえ、開かれねばありえなかった世界とは、いかなるものであるのか。それはもともとはなかった世界であり、開かれずとも触れえずともよかつた世界である。ある特定のものを読まずには生き延びえないと想定する普遍的な書物はない。しかしながら、私たちは任意の書物に出会って生き延びていることもまた真実であるならば、それなくしてはまた生きえない。

こうして、大滝安吉の詩集という書物に出会う。書物を前にして世界はまだ開かれてはいない。頁がめくられ、読みこまれることよつてのみ、世界は立ち現れてくる。それはなくてもよかつた世界であり、それなくしては生き延びえなかつた世界でもある。

生成される世界は一個の人間が生きた情念の熱さによつてであることを、大滝安吉の詩集が告げている。面識もない人間によつて心が昂揚される不思議さは、ひとがひとと関わりあうことで実存することと会つたこともない関係性によつて図られることの神秘さによつて倍加される。現存在としての人間が内包している原理は他者との関係性において実現する自己のありようであること

を、読書という営為が伝えてくれる。

書物はひとつの宇宙である。生は誕生しなかったらなかったように、それは開かれねばありえなかった世界である。同じように、書くことによつて己れの生が現出する。彼は書いている——<sup>(4)</sup>詩を作ることによつて、同時に僕等自身が作られている<sup>(5)</sup>。詩作が己れの生であるとするれば、それが記録されえた詩集なるものは、永遠に生きることになる。

ひとが〔いまここ〕にあることの内実が、詩集を媒介にして立ち現れている。詩集をひもとくひとの現在には、かつて作り手の創造によつて図られたものだ。死者はこうして生きている。かつて生きた者が〔いまここ〕で読み手によつて蘇る。しかも、想定されたものとは違う世界を形成して。

成長↓進化↓成熟（死）は、人間存在のありようを規定しているものであり、宇宙内時間へと溶け込んでいるものである。一方、詩を創りうる存在こそは、己れを抜けて宇宙内存在へと実存してゆく。それは、他者という読み手によつて超物質的な経験をしうる脱自的な存在

と言える。

読むことなしには知りえなかった他者の世界は、頁をめくらなければ現出しえなかった己れの世界である。言い換えれば、頁をめくらなければ現出しえなかった他者の世界は、読まれなければ触れえなかった自己の世界でもある。人ひとりが生きた事実が己れの生へと関わり、己れの生がこうして生成されてゆく。生きることは他者の生を生きることでもあったのだ。

## 五、詩という靈性

自己に他者を発見し他者に自己を発見することによつて、問いは位相を変えて問い直される。たとえば、自己の生命は自然の生命へと入れ替わる。次の詩において考察されているのは、<sup>(6)</sup>永遠と限られた生命との関係<sup>(7)</sup>ばかりではなく、他者の存在に照らされた自己の存在のありようであり、ひととは異なる生命に投射された己れの生命である。

## 桃の木

この夏

わが家の庭に移し植えられた

小さな桃の木

この突然にふりかかった災害と

どれほど闘わねばならなかったか

ふりそそぐ苛烈な陽ざしの中を

ぼくはせつせと水を運んだが

しかし、まばらにつけていたうすみどりの葉は

一枚、一枚黄色にしぼみ

乾いて落ちていった

そして、夏から秋 ついに

細い黒ずんだ一本の幹だけになって

地上に突き刺さっていた

果して生きているのかどうか

ある日、ぼくはこんな文章を眼にとめた

「秋、木々が紅葉するのは

葉が病むのではない

葉の栄養を幹がとり込み

枝だけになって乏しい冬に耐えるためなのだ」と

してみると、あの桃の木が葉を落としたのも

単なる敗北のあかしではなかった

それは、ひそかな闘いの宣言

そして根が大地を組織する間

わずかな情熱を強固に守ろうとしていたのだ

今、空は遥かにかげのぼり

やがて冬に入ろうとする季節

桃の木はいぜんとして

黒ずんだまま大地に突き刺さっているが

果してそれは生きているのだろうか

それとも、

雪が来て 桃の木は声もなく横たわり

その死を告げるのであろうか

Aとは何か。その前に、たとえばBとは何か。相互に共通する内実Xがあるときに、AはXである事実性が根拠をもつだろう。宇宙における生物の生きうる理由が、相互の位相から立場を変えて発信されるにちがいない。

「桃の木」において、Aは人間であり、Bは桃の木である。桃の木は、その誕生を契機にして、△突然にふりかかった災害▽と闘いつづけなければいけない。同じように人間もまた、そうではなかったか。

「形象化について」という詩論において、ニコラーエヴァーの『文学の特殊性』を紹介しながら、現実認識には論理的認識と形象的認識の二種類があり、芸術は後者の方法に拠ると大滝安吉は述べている。執筆の動機が存在論に促されている一方、執筆の方法が形象的認識なるものに拠ろうとしているところに、詩に向かう大滝安吉の姿勢が見て取れる。「桃の木」という詩篇にあてはめれば、△現象の中にあるもつとも本質的で特徴的なものを一般化する▽という視点が捕らえたものは、桃の木という植物の生命だった。

「形象化について」における考察の内実は、科学と芸術、

客観と主観、具象と抽象、という二項対立のもとに浮かび上がってくる。△科学的事実がどのように芸術的実質Ⅱ詩に転化されるのか▽という問いかけに潜んでいるのは、此岸から彼岸へと跳躍しようとする意志による詩的表出である。その折りに似た進化への希求はそのまま存在のありようを規定している。「いまそこ」にあること以外に選択肢はなく、また「いまそこ」を超え出る以外になす術はない。そして、願うことそれ自体が生でありうる可能性を、次の詩篇は模索している。

#### 博物館にて

歩いてわずか数歩の空間だが  
そこに億年の歳月が掘り起され  
一瞥のもとに  
魚から鳥への進化が跡づけられた

そのうすぐらい博物館を出て  
五月の庭に立つと 不意に

## 風の歌



飛魚は鳥になることを信じたか  
ひれが翼になることを信じたか  
海原に 青い影をひいて  
扇形のひれを鮮やかにひらき  
億年  
飛魚は飛んだ  
飛んだ 飛魚は  
鳥になることを信じたか  
ひれが翼になることを信じたか  
知らない 飛魚は知らない  
信じるなんていうことを知らない  
知らない飛魚は飛んだ  
飛魚は飛んだ  
ひたすら願った  
激しく願った  
もう少し遠く飛ぶことを  
少しでも遠く飛ぶことを

それだけを

海から陸へ、陸から海へ、海から空へ——生命の希求は天への志向にあることが、薄暗い博物館の一角に置かれた標本によつて示されている。△わずか数歩の空間▽が途方もない時間の存在を知らしめることを、五月の風が不意に伝える。凝縮された時間のなかに眺望されているのは、種の形態ばかりではない。超出しうる個体の意志それ自体もまた。

風が歌うのは、ひとつの願い。小さな飛魚の、存在をかけた願い。存在のありようも知らずにひたすら願うことで生きた飛魚。詩人が飛魚に見ているのは、生命というありようの真理である。

位相を変えたときに、事の道理が顕れる。博物館のなかを数歩進んだときに、そして、博物館から五月の庭へと移行したときに——。薄暗い建物からさわやかな庭へと移行することで顕れるのは、宇宙のありようばかりでなく、己れという存在のありようである。「いまこゝ」に啓示のように顕れる生命の歴史は、宇宙の創造主へと

問いを投げ返すことで問われる己れという存在の意志である。

わたしたちはなぜここにいるのか？ 飛魚がひたすら飛ぶことだけを願ったように、問いかけることそれ自体が超出する実存である可能性を、「博物館にて」は示唆している。信じることを飛魚が知らないように、「いまここ」にいる訳をわたしたちは知らない。ただ、「いまここ」から抜け出ようとする意志の在処を確かめることはできる。

問いかけることによつて、位相を変え、次の問いが生成される。生きることが「いまここ」を超出すること、すなわち「いまここ」ではないところへと移行することであるように。つまり、問いは解答されるのではない。解答されえない地平を乗り越えて、存在の明かるみへと超え出ようとする願いによつて問いは引き継がれてゆく。そこに生という実存があつたのだ。

魚は魚のままで充足しているのではない。同じように、ひとまた。あらゆる生命は進化するように仕組まれている。超え出るように仕組まれているのが創造主の

計らいであるならば、進化は願いであると同時に闘いであり、この世に現出したことそれ自体からの超出である。

永遠が無限の時間を表すのだとしたら、人間存在もまた無限の時間へと組み込まれていることになる。そして、仮に人間存在とはイモータルな存在であるならば、成長や進化などのない不変の状態があるだけであろう。そこには、かぎりなく停止に似た状態、すなわち無があるだけのように思われる。言い換えれば、進化へと辿る情動こそが生命の原理であつた。進化とは、願いであると同時に闘いであり、この世に現出したことそれ自体からの超出であると同時に死からの脱却である。その意味において、「博物館にて」は脱自的に存在している詩篇と言える。

宇宙における存在とは、突然にわき起こったものである。宇宙それ自体がそうであるように。紅葉し、落葉し、再び木の葉が葉を取り戻す。同じように人もまた、人から人へとリレーする種のなかにいる。「桃の木」において考察されていたのは、桃の木と同程度に存在している



人間のありようである。桃の木の花への植樹は人間の誕生と相似であり、災害に似た椿事である。したがって、闘いつづけることが存在しつづけることと同質の世界がここにある。

桃の木にへん闘いVの意志を見出すことによって、己れが生きうる。詩人が発見したのはむしろ己れのうちなる闘いの意志であり、宇宙に生きゆく根拠となるべきへ情熱Vの在処である。スコリモフスキーは述べる——へ美の働きは感性的なものの高揚であり、また生命の生物学的側面の高揚でもある。詩の働きは生命の凝縮された象徴的な明確化なのであるV。<sup>(5)</sup>「桃の木」という詩篇が象徴的に告げているのは、桃の木と自己が向き合うことで、他者が発見され自己の重なり合う霊性という謎である。気遣い気遣われることで自己と他者が存在しうる理へと、詩人は辿り着いている。

詩篇「桃の木」にある霊性とは、植物である桃の木へと思いを寄せる存在の気遣いによって生じるものである。存在における相似的な原理を見出すことによって、他と個が重なり合う。すなわち、他者と自己が互いの存在原

理を生きることによって、響き合う宇宙が存在する。生きることは他者の発見であり、自己の存在はそれによって生かされている。

## 六、公益と文学

わたしたちはなぜいまここではないところにいないのか？ 問いの反転は自明の理を伝えてくれる。わたしたちはいまここににいるからだ。そして、問いは元に戻る。わたしたちはなぜいまここににいるのか？ これは不毛な問いの循環だ。

しかしながら、もうふたつの類型を当てはめると、新たに浮かび上がってくる問いの内実がある。すなわち、一人称から二人称（三人称）への転換——なぜあなたたち（あのひとたち）はここ（そこ）にいるのか？ 問いは自己から他者へと放たれる。つまり、問いは他者への気遣いのうちに生成される。問い自体が對他存在としての人間のありようを提起しており、存在をその明か

るみのうちに浮かび上がらせる。

## 星

日に一度の注射と

三度の食事の時以外は

床の中に横臥している生活。

白い壁に掛けられた

淡彩画の自画像と相対して居れば

風は窓をゆすつて遠く過ぎる。

体中がほてり

どうしようもなく疲れを覚える日は

ねむるより仕方のない生活だが、

時には、机の片隅で

花を落した細い茎の

丸い窪みが 静かに潤いを帯びて来るように

眼蓋をおし開き

銀鈴をならしながら

僕の体に いのちが湧き上つて来る時がある。

そんな夜は、かすかではあるが

窓には 僕の星が輝き

全市にはりめぐらされた鉛管には

小高い丘の上の貯水タンクから

水の溢れひしめいているのを感じる。

もとより僕は

このような時間の短いことを知っている

明日はまた 舌の上に

白いこけを積んで明けることも知っている

けれどもこの日頃、僕はたしかに知った

差しのべ、差しのべられた手の重なりの中に

夜の窓が 愛と誠実をたたえて拡がるとき

あなたの目の中に 僕の星が宿り  
僕の目の中に あなたの星が宿る  
そのよろこびの中に於てのみ  
わずかに残されたこのいのちさえも  
赤々と燃えることが出来るのだと。

いのちが僕の体をこぼれ、空にひかる夜  
だから おし開かれた僕の眼は  
あなたの星を探してさまよい  
僕の心は

水道の栓をまわす  
穢されない あなたの手をもとめて乾く

そして、長い模索のおわり  
いつもぎまつて、希望と誓いの時が来る

たとえこの後、  
僕の体にどのようなことがあらうと

僕のいのちは

世界の上に拡がった 限らない空の中で  
あなたの星と共に輝きを加え

或いは ふと ある夜

あなたの視界から  
星のように消えてしまいたいと。

病があつて生の実感がある。生命は、それを阻もうとするものによつて浮き彫りになる。桃の木のように、ひとつの場所から動きえない。自らが望んだ状況にないならば、なすべきことは反抗であり闘いである。しかしながら、何をもつて闘いとなすのか。

壁に掛けられた淡彩画と相対するよりほかにないとしても、内省はしつかりと意識を満たしてくる。通り過ぎる風のように、意識は時間を生きる。病との闘いは、生きていることが闘いであるように、なぜここにいるのかという問いへの闘いである。たとえ眠るよりほかにはないとしても、湧き上がってくる生命があり、生きゆく存在が

ある。

ひとは床に伏していること以外なにもなしえないのではない。意識こそは実存の根拠である。それは、世界を巡る。貯水タンクから溢れひしめく水のように。海から陸、陸から海、海から空へと、進化した生命のように。

空に、△僕の星▽が輝くのだという。ひたすら願った結実としての星。それは幻影のように美しい。そして、光り輝く存在の時間性は有限であるという認識を、無限の宇宙空間へと投げ返す意志がここにある。非本来的時間においては、病はひたひたと身体を蝕んでいくからだ。限られた生命であるからこそ光り輝く存在の明かるみ。モーターな存在であるからこそ、感知しうる△愛と誠実▽。對他存在としての△手の重なり▽が生む、相互存在の温もり。これらは、限りある生を輝くべきものとして照らし出す。

望むことなく現出してしまった生に対してなしうることはあまりない。思いやることや気遣うこと、それ以外生の意義は對他存在という人間関係性にあることを、第九連は告げている。△あなたの目の中に僕の星が宿り／

僕の目の中にあなたの星が宿る▽という相互関係性が美しい——△そのよろこびの中に於てのみ／わずかに残されたこのいのちさえも／赤々と燃えることが出来るのだと▽。認識が詩を生み、詩が世界を生成する。世界は人間存在という靈性によつて表出されている。△詩を作ることによつて、同時に僕等自身が作られている▽<sup>1</sup>。すなわち、詩作が生そのものであり、その意味において詩篇は永遠を生きることになる。

生命は寝たきりにされることに反抗する。他者を希求すること満ちてくる意識があり、意識こそは実存を形どつて夜空に輝く。生きるとは、次の相への超出であり、世界への希求であり、他者への恋情であつたのだ。果てることなくつづく模索は、△希望と誓い▽を引き連れてやってくる。

身体という実在が滅びたあとでさえ光り輝くものは、本来的時間を天空へと昇つた意識という生命。それは他者の生命と共鳴しあつて宇宙を響かせるだろう。「いまここ」を超え出たところに実存する生命があるとすれば、意識による世界である。それは靈性という謎を引き連れ

てやってくる。詩篇が存在そのものであり、謎そのものであり問いそのものであるものが生命である。誕生から死へと辿る実在はいつしか終焉を迎える。しかしながら、完成された詩篇は永遠を生きるように星となつて輝く。有限なる存在の無限なる宇宙へと自己企投しうる意志こそは、闘う存在としての核である。存在すること自体が闘いの内実であつたのだ。

詩集はひとつの宇宙である。開かれねばなかつた生のように、他者は読み手によつてふたたび誕生する。大滝安吉が八桃の木Vを生きたように、読み手もまた他者の意識を生き延びうる。響き合う宇宙とは、相互存在の感性の高揚であり、したがつて、自己が他者と共鳴しあう世界である。誕生から死へと辿るドラマは、個々の存在を通じてリレーのように、展開されうる。他者との關係性を生きる存在という発想においては、自己は不滅と言える。共鳴しうる他者へと生命が引き継がれてゆくからだ。

もともとはなかつた生が、読書という営為によつてこうして引き継がれゆく。そのこと自体が宇宙の神秘であ

り、その謎と共鳴しうる存在が靈性としての生命である。詩はモノではない。存在が詩へと昇華していくならば、現存在とはもはや靈的なものである。それは自己のありようを再提起してくれる。すなわち、生きるに値する生とは、他者を生きる生である。

こうして、配慮的に氣遣う存在こそが、自己をも他者をも救うにいたる。ハイデガーが述べるように、「自己自身の終わりに向かう存在」であり、「つねにいまだーないであり未成熟の存在」である現存在は、他者に自己を見出す存在であり、他者を生きる自己であつたのだ。

他者への愛こそは、文学における公益性である。それは、對他存在を支え、氣遣いを生み、己れを救うだろう。自殺・殺人回避のプログラムは、自己が他者を生きうる可能性に潜んでいる。すなわち、「自己という他者」「他者という自己」を可能ならしめる存在は、読み手という創造主であり、自己という他者の演じ手である。

## 注

- (1) ミシエル・トゥルニエ（松田浩則訳）『海辺のフィアンセたち』紀伊國屋書店、一九九八年、「手が読むことのできる時」二四八、二四九頁
  - (2) 大滝安吉（吉野弘編）『純白の意志―大滝安吉詩篇詩論集』花神社、一九八四年、「現代詩の方向」一九二、一九三頁
  - (3) ヘンリック・スコリモフスキー（間瀬啓允・矢嶋直規訳）『エコフィロソフィ』法蔵館、一九九九年、二五頁
  - (4) 大滝安吉（吉野弘編）『純白の意志―大滝安吉詩篇詩論集』花神社、一九八四年、「現代詩の方向」一九八頁
  - (5) ヘンリック・スコリモフスキー（間瀬啓允・矢嶋直規訳）『エコフィロソフィ』法蔵館、一九九九年、一七五頁
- \* 詩篇「桃の木」「博物館にて」「星」は、大滝安吉（吉野弘編）『純白の意志―大滝安吉詩篇詩論集』花神社、一九八四年、より

## 参考文献

大滝安吉（吉野弘編）『純白の意志―大滝安吉詩篇詩論集』

花神社、一九八四年

大滝安吉（吉野弘編）『大滝安吉詩集』酒田市詩集刊行会、一九六六年

大滝安吉『大滝安吉詩集拾遺』内藤三保発行、二〇〇四年

ミシエル・トゥルニエ（松田浩則訳）『海辺のフィアンセたち』

紀伊國屋書店、一九九八年

ヘンリック・スコリモフスキー（間瀬啓允・矢嶋直規訳）『エ

コフィロソフィ』法蔵館、一九九九年

ジョージ・スタイナー（生松敬三訳）『マルティン・ハイデガー』

岩波書店、二〇〇〇年

木田元『ハイデガー』岩波書店、二〇〇一年

小松隆二『公益学のすすめ』慶應義塾大学出版会株式会社

社、二〇〇〇年